とある本屋の魔術講座

ドーナツ教開祖　安藤ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある本屋の魔術講座

【Ｎコード】
Ｎ５０７１Ｍ

【作者名】
ドーナツ教開祖　安藤ナツ

【あらすじ】
とある本屋で店主と小野が交わるとき、物語が動き出す。
禁書目録ファンの皆さん、この話には一人のヒーローも、超能力者も出てきません。ましてや魔術師なんてありえません。
ただの放課後の与太話です。
この世に神様なんて不要ですからね。

（前書き）

本屋の店主と女子高生小野の会話劇、待望？　切望？　の第二段です。

こうすれば私の作品を読む人が増えるのでは？

姑息なタイトルで人気を狙います。

「店長。これ知ってる？」

花も恥らうの意味もわからない女子高生の小野は、両手に抱えた十数冊の本を店長に見せる。

可愛らしい外国人と思われるの女の子と、日本人にしか見えない男の子が、日本ではないレンガの町並みを歩いているイラストが表紙の、所謂ライトノベルであった。

無精ヒゲが似合わない三十路の店主が、そこに書かれた文字を音読する。

「あー？　とある魔術の……禁書目録？　知ねーよ。ってか、本屋にそんな不吉な単語の書かれた本を持って来るなよ」

「いや、この店の本だよ」

自分の店に置かれた商品を確認できていない店主（本当に店主です。念のため）に呆れながら、小野は同一のタイトルが書かれた文庫本をレジに置いた。七巻から始まって、二十巻まで。よく見ればSSと銘打ったモノもあり、実に十六冊の本がそこには積まれていた。七巻以前の巻は友達に貰ったので、中途半端な巻数からの買い物であった。

「知らないの？　本屋さんなのに。まあいいや、これちょうーだい」

「おお！　こんなに買ってってくれるのか！　小野は神様だな」

今日初めてのお客様に、店主が嬉しそうにレジを打ち始める。ちなみに、ただいまの時刻は午後五時少し前だ。この本屋は、何故潰

れないのだろうか？　謎である。
　嬉しそうな店主の横顔に興味のない小野は、通学用の鞄から装飾のない革の財布を取り出す。なんとも男らしい一品だった。

「しかしよく見りゃ、見たことあるな」当たり前だ。
「魔術と科学が交差するとき、物語が始まる！　ねえ。物語って言うのは、始まった時点で既に始まってるからな。こういう表記は嘘じゃないのか？」
「知らないよ。でもね、人気あるんだよ！　アニメになってるしー、すぴんおふ？　で漫画出てるしー、ゲームにもなっちゃうし！」

　まるでこの本の売れ行きが自分の評価に繋がるとでも言うように、小野は自らが購入する本を褒めちぎる。店主も売れれば別に内容等どうでもいいので、「その通りだな！　俺が間違っていたぜ！」と不思議なテンションで応対する。

「しかし魔術と科学ね。なかなか面白そうではあるな」
「でしょでしょ」
「元々、相反するようでいて、両方とも根っこは同じだからな」
「全然違うよ。店長」

　いつものように適当な言葉を並べる店主に、小野が冷たく突っ込みを入れる。
　が、意外なことに店主の目はマジだった。さっさと帰ってこの本を読もうと思っていたのだが、店主のマジ話は小野にとっては最高の娯楽である。本はいつでも読めるが、マジ話は気分屋な店主の機嫌に左右されるので、ここで聞き逃す手はない。

「根っこって、どの辺りが一緒なのさ」

楽しみにしているのを悟られないように、小野が興味なさそうに呟く。

「勿論、この世界を解明したいって意味さ。二つとも哲学的な問いの答えでしかない」

「かいめい？　名前を変えるのが魔術と科学の意味なの？」

「……知り尽くすことが目的ってことだ。基本的に根本的に、全部なんでも知りたいから、人間は魔術と科学を考えたんだよ。例えば、この世界は誰が造ったんだろう？　って疑問がある。そこから、『無』があったとか『原初の巨人』がとかそういうことが最初にあったわけだ」

「ふーん。それがどう科学と魔術に繋がるわけ？」

「『錬金術』って聴いたことあるか？」

生粋の漫画好きである小野に、その質問は無粋だった。錬金術が出てくる漫画は幾つも知っているし、そもそも買おうとしているライトノベルでも強敵として登場している。

「『柔らかい石』造ってた人でしょ？」

「アレは名作だった」

「そういえば、言ってたね。錬金術の実験が科学の元になったって」

「そ、だから根っこは同じわけだよ。一体どうやって神様は人間を創ったんだ？　この世の中の『真理』とは何なんだ？　って錬金術師ががんばっているうちに、幾つモノ法則が発見され、科学になった。時は流れ、誰でもわかりやすく扱いやすい科学が発達し、錬金術は滅んだ」

小野にとって化学は非情にわかりにくい授業でしかないので、その言葉に頷く人間はこの本屋にはいなかった。

「でもな、今でこそ魔術は荒唐無稽と蔑まれてるが、ちょっと前までは魔術の時代だったんだよ」
「そんなポケベルが流行ってたみたいな言い方されても」
「例えばだな、占星術なんて、現代魔術の代表格だな。未だに根強く信仰されてるだろ？　星占いってやつだな、星座で当てる朝のテレビの。あれの長い時間をかけた観測結果は、天文学にも使われるくらいだ。そのデータから導き出す未来を、荒唐無稽と笑うのもどうかとおもうぜ？」
「なるなる。根っこって言うか、途中まで一緒だったんだ」

店主の説明に力強く相槌を打つ小野。星占いは毎朝見ているので、店主の話は良くわかった。
確かに、あの占いの星座と言う概念は科学とは程遠い。ギリシャ神話のキャラがモチーフの、オカルトもオカルトな星を適当に一括りにしたものである。
魔術を忘れる事のできる人間は中々いない。

「って、ことは魔術と神話も同じ根っこ？」

いい質問だな。小野の疑問を店主が短く褒める。

「そうだな、大体が大体、神話の神様悪魔の力の模倣が魔術だな」
「ドラゴンブレスとか、唯閃とか、ルーン文字とかも？」
「他のは知らんが、ルーン文字はそうだな。北欧神話の最高神の『オーディン』が創った魔法文字だな。普通に日常で使われるものもあるが、何種類かは、魔法の意味が込められている」
「へー。そうなんだ。因みに、前の二つはこの小説の技名だよ」

そう言って、小野は清算前の一冊を手にとって取る。巻頭のカラーイラストから、お目当ての人物を探す。

「いたいた」笑って指差したのは赤毛のタバコを咥えた青年。目の下に奇妙な線が走っている。これがペイントであればいいなと、店主は祈った。

「ステイル君。イギリス清教の神父で魔術師で、ルーンを使うんだよ」

「うーむ。なんだか複雑な表現だな」

「何が？　魔術師だからルーンを使うのに不思議があるの？」

「あるんだな。それが」

楽しそうに店主の唇がつりあがる。

笑っているのに間違いはないが、似合わない無精ひげのせいで、口元が歪んでいると表現したほうがしっくりくる笑みであった。

「清教って言うならキリスト教なんだろうな。プロテスタントの大きな組織の一つで、ピューリタン革命で有名だな。その役職に、神父はないんだよ。司祭と言う役職の人間に対する、親しみを込めた呼び方だからな」

「別に良いじゃん。キャラクター紹介が少しくらいフレンドリーでも」

「まあ、今のは単なる豆知識だ。明日友達に自慢しな」

一体どういった状況に陥れば、そんな知識を披露するタイミングになるのだろうか。が、小野は恐らく空気を読まず、明日の朝一番にでも脈絡なくこの知識を自慢げに語るだろう。

「問題は、仮にもプロテスタントの司祭様が、ルーンを使うことにあるんだよ」

「ルーンも神話のものなんでしょ？　神様の創った文字なら問題ないじゃん」

「神話と神様が違うんだよ。プロテスタントの神話ってか、聖書の中には神様は一人しか出てこない。完全無欠な神様は当然一人で十分だからな。そして、ルーンを創ったオーディンは北欧神話の神様だ。つまり、この二人の神様は別のお話の神様なんだ」
「それで？」
「プロテスタントの教義として、基本的に神様は一人なんだよ。唯一神ヤハァエただ一人。まあ、キリスト教全般にいえることだけど」

もっとも、グノーシスの連中はそう考えていないみたいだけど。
店主は徹頭徹尾意味不明なことを呟いた後に、小野が起きていることを確認して話を続ける。

「つまり、それ以外の神様は認めてないんだよ。北欧神話って言う、全く違う作品の神様すら許さないんだ。傲慢だろう？　普通、違う漫画に同じ名前の人間が出ててもなんとも思わないだろ？　だけどあいつらは違うんだよ。『真似したな！　許さない！』ってもう講義するんだよ。酷い奴だろ？」

その理由は、やはりこの世界を知りたいからである。
何個も何個も、世界を造った記述があっては納得できない。納得できないから、その神様を否定し、自らの正当性を訴える。
誰だって、自分の考えが否定されるのはいい気分ではない。

「だから、仮にも司祭が他の神様が創り出したルールを使うなんてありえないんだ。そう言う考えは異端とされて、破棄されていった、宗教戦争っていうのがあるくらいだからな」
「なるなる。ステイル君は、敵の技で戦っている感じ？」
「その通り。時代が時代だったら異端審問にかけられて火あぶりにされているぞ」

いい加減な作品だな。
軽蔑するように店主が言うが、小野は「ふふーん」と不敵に笑う。馬鹿っぽさが前面に出ているので、不敵の『敵とは思わない』と言う意味がこれ以上しっくり来ることもそうそうないだろう。

「何がおかしい。小野。これは取材不足だろ！　準備不足だ！　否定することはできないはずだ！」
「甘いね。ステイル君が所属するのは『必要悪の教会』なのだ」
「なのだって、それがなんだ……まさか！」

小野の語る言葉の行く先を理解し、言葉を詰まらせる店主。それにしてもノリノリである。
が、

「え？　何がまさか？」

悲しいかな、小野はそのノリに一切理解を示さなかった。

「お前、ここは『そう、お前が考えている通りだ！』ってシーンだろ？」
「……嘘！　アレだけでわかっちゃったの？　えー！　私がかっこよく解説するシーンなのに」
「俺が悪いみたいに言うな。お前が馬鹿なのが理由だから」
「あーあ。つまんないなー。あ、でもそう言うフリしただけ？　本当はわかってないとか？　そうやって私の気を削いで、わからなかったことを誤魔化そうと言う算段で……」
「他の宗教ってか魔術に対抗するために、多少の教義違反は許される。必要悪ってそういうことだろ」
「言っちゃった！　私がアレだけ言いたがってたのを見て、言っちゃったよこの人！」

「いや、もう面倒だしいいや」

気分屋の本領発揮か、店主はさっさと帰れと外を顎で示す。

何か釈然としない小野ではあったが、それなり満足はしていた。最初の辺のやりとりは一切覚えてないが、別に人生の役に立たせようと殊勝な気持ちで聴いているわけではない。

こうやって、店主と馬鹿な話をすることができれば、小野には十分だった。

「むー。わかった。で、いくら？」

「ああ、金はいらんぞ」

「はあ？」

店主の奇天烈な発言に、素っ頓狂な声が上がる。

「俺が読むから、その後に売ってやるよ」

「何で？　どうしてそんな結論が出るの？」

中古が欲しいなら古本屋に行くよ！　小野が怒鳴る。

「お前の話聴いてたらステイル君の活躍が気になったんだよ」

自分勝手な一言に、小野は怒るべきタイミングであったのに、彼女は真逆の行動を取った。

「でしょ！　面白そうでしょ」

人間、自分が好きなものが認められることを、自分が認められたと勘違いする時がある。

今がまさにそれだった。

「ああ、面白そうだな。次合うときは一緒にステイル君について語ろうか」
「わかった、仕方ないわね」
「お前もアレだ、一巻から読み直しとけ、なんか新たな発見あるかも」
「それもそうね。じゃあ、私帰るね」
「あ、帰る前に一巻から取ってきてくれる？」

「いや、一体どんな店だよ」

律儀に一巻を店長に渡したて帰路についた後、小野は自分が買うまであの本屋が潰れないように神に祈った。

（後書き）

評価はいつでも待っています。

殆ど一気に書き上げるスタイル上、話にまとまりがなかったり、誤字脱字が多かったりします。
よって、アドバイス大歓迎です。

店主さんと小野ちゃんに話して欲しい話題が合ったら、気軽にリクエストしてください。
リクエストする人は、名前だしオッケーかどうかも明記してください。
前書きに『〇〇先生のリクエストで、〜〜です』と紹介します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5071m/

とある本屋の魔術講座

2010年10月10日04時07分発行